山崎農業研究所を支える力
―― 40年を振り返って

安富六郎

山崎イズム＝現場主義を貫く

創立40年を振り返ると、この研究所の活動は徐々にではあるが、農村社会に浸透してきたと思う。この背後には、会員の努力と現場の声を重視しようとする現場主義の山崎イズムがあったからである。これを端的に示すものに山崎（記念）農業賞がある。創立当時には、行政から独立した立場で自由に研究し、農政批判をすることは必ずしも簡単ではなかった。なかでも山崎先生の専門とされた農業／農村工学は農政に直結しているので、政府の主旨に反することを公に述べることは、かなり勇気のいることであった。このような状況では、現場の優れた技術も批判的な意見も埋もれてしまうであろう。研究所が今あるのは40年間、その目指す農村文化、地域環境の向上、国際的な技術協力などの調査研究と並んで、権力に迎合せず、現場の優れた技術を正当に評価し、励ますことを守り続けたからと言える。農業賞がその役割を果たしてきたと思われる。

山崎イズムにとって、当時、農業の実態を現地でよく観察していた岩大工法（水田造成の浸透抑制のための破砕転圧工法）の推進者、石川武男氏（元岩手大学名誉教授）のおられたことも大きな励みとなった。山崎農研が初めて取り組んだ仕事のなかに、秋田県稲川町の欠陥水田調査がある。国の進める大型水田圃場整備には、設計の基準が細かく定められていて、あらかじめ、それを満たさねばならない。しかしこれがもとで作土にレキ層が混じり、田植えのできない水田が広範囲に生じた。山崎先生は、これを現地調査し、現地農民の意見を取り入れて根本的な検討を加え、対策を提言した。この結果、国の設計基準も改善され、地元農家のみならず県からも大変喜ばれた。農水省にも現場をよく理解した人がいたことも大きな力となった。

農業賞に山崎イズムが最も端的に現われたものは菱沼達也氏の第1回（1975年）受賞の『私の農学概論』である。菱沼氏は医学生時代から反戦平和運動に参加され、戦時中に医学と農民運動の接点から獣医学を専攻し、東京教育大学農学部で総合農学に教鞭を執られた。江戸末期の農村改革者、大原幽学に興味をもったそうだ。研究室から農民社会の中で生活し、そこから農業を学び、また学術的な知恵を加え、農村に還元し農民の生活を豊かにしようと努力した。千葉の成田に入り、市民のための小さな新聞も発行し、農民の意識改革にも積極的に働きかけた。総合農学という考えを著書『私の農学概論』にまとめ、農業教育の本質を分かりやすく示した。表彰理由には、その活動が既存のアカデミズムやジャーナリズムでは評価されずに埋もれてしまうこともあったと記憶する。

農業賞にみる山崎イズム

農業・農民を勇気づけた先輩は、この他にも多くおられるが、そのなかにいつも山崎イズムを見出すことができる。受賞者の何人かを思い出すままに列記した。

第15回(1989)仲山尚江氏の『観察と記録にもとづく稲作と詩作』。若いときにご主人を亡くされ、女手一つで2町歩の稲作専業農家として家を支えた。現場の稲作の生育状況を細かく観察し、仲山流の稲作育成の技術を編み出した。「稲のことは稲に聞け」という稲作管理技術である。余暇には詩を作り、音楽を楽しむという余裕も示す篤農家は農民文学者でもあり、農村女性に励みと自信を与えた。

第16回(1990)受賞の安間節子氏は『農村の機械による作業事故、農村主婦の生活改善』などに努力され、生活改良普及員として農家生活指導、さらに高齢者対策に早くから注目した。養護施設を設けるなど、農村の生活指導に積極的に対応し、農民の命を守る活動に情熱を注いだ。

第18回(1992)受賞した岸本定吉氏の表彰理由は『炭やきを通して、森林資源の有効利用と地域農業の活性化への寄与』である。森林保護対策の一つとして、炭焼き産業を農村活性化に結びつけた。北海道の根釧原野牧場、南九州の水源地帯の養鶏汚水対策に取り組み、木炭の木酢液と木炭の浄化能力で問題解決を図った。森林廃材、未利用資源利用、炭焼き産業の育成によって過疎化する村の活性化に貢献した。

第20回(1995)の西川裕人氏は『農と食と教育を考える集い』を主催し、生産と消費、環境と農業・教育の結合を目指す運動に専心した。日本の農業、食、農業教育の空洞化はすさまじい勢いで進行していたが、これを止めるため、生産者と消費者が手を結ぶ地産地消の運動を起こした。「知恵を出し合って行くことによって展望が開ける。教育も同じであり、これを実現するには地域に根ざした学校づくりが重要」という強い信念を持っていた。定期的に集会を開き、運動を進めた。学生に現場主義を体験させ、地域と農業高校をつなげた。氏の教えは、いまも多くの若者の心に受け継がれているはずである。

さらに第31回受賞(2006)原田勉氏は山崎先生と創設と発展に努力した。著作などで山崎農研の活動を全国に伝えたのみならず、電子メール「電子耕」を毎週発行し、読者からの感想も受け、農業問題を共に考えようとした。

この40年を振り返ると、農村女性の力、高齢化対策、森林保護、過疎化などへの問題意識、さらに若者の活動による農業、農村、環境の移り変わりを賞全体から知ることができる。多くの女性が受賞に輝いて見えるのも、農村における女性の地位向上と、その正当な評価によるものである。受賞者が、いまも社会的影響を与えつつあることを思うとき、また山崎イズムを支える会員の方々に感謝し、山崎記念農業賞の精神が今後も生き続け、発展することを願ってやまない。

(やすとみろくろう=山崎農業研究所所長)